

第二句集

夏の海

石黒哲三



著者近影 大学の研究室にて

## はしがき

一九九九年三月末に、白鷗大学女子短期大学部教授、英語科科长の職を辞し、四十三年間にわたる教員生活に終止符を打った。

この区切りの年の記念に、第一句集『雪椿』出版後の一年間（一九九八年九月―一九九九年八月）の身ほとりの出来事を日記代わりに俳句で記録して残すことにしたのが、この句集である。

また、この一年間は妻の範子にとっても大変な一年となった。肺癌の転移のため、再入院、再手術となってしまったからである。

したがって、この句集は私の生活記録であると同時に、妻の闘病記録でもあるので、い

わば妻と私の生活史である。

なお、句集の名は、この中の

ふるさとに見せたきものに夏の海

から採ったが、この海は、私の故郷、新潟県の柏崎の海で、私の一番のふるさと自慢である。

一九九九年秋

著者しるす

## 目次

はしがき	1
秋の章	5
冬の章	53
春の章	85
夏の章	121
終章『雪椿』より再録	167
あとがき	189

秋  
の  
章

秋冷や妻小康を保ちゐて

肺癌手術から一年。驚異的な回復ぶりに、ただただ神仏に感謝。一年前は「退院は全治にみならず秋暑し」の感なきにしもあらずだったが……。

巨星墜ちしとど露けき羅生門

九月六日、黒沢明監督逝去。

喧かまびしき去就談義や秋暑し

すったもんだの末、九月十二日、巨人長嶋監督の続投決定。

白露や孤城落日巨人はや

九月十五日、対横浜戦に敗れ、巨人の優勝は絶望的となる。

敬老の日のおだやかに昏れにけり

秋晴れのよい一日なり。

台風の過ぎたる空の蒼さかな

九月十六日未明、突如台風四号襲来。あつという間に通り返り、台風一過の晴天となる。

横浜にて八句

潮騒しお さいも街騒まゐもなく天高し

九月十七日、パンパシフィックホテル横浜の十九階のトリブルームに家族三人で宿泊。高階からの眺めは格別なり。

10

潮の香のかすかにありて秋涼し

潮の香は郷愁を誘うので、ジーンとくるものあり。

ミニチュアのごとき街並み秋の虹

十九階から見ると、横浜の市街は箱庭のよう……。空には虹がかかり、見事な景に嘆声をあげる。

見晴るかす丹沢の嶺ねや秋茜あかね

遠くの丹沢山塊が茜色に染まり、まるで絵ハガキを見ているよう……。

11



名月や眼下はるかにネオン街

日が暮れてからは、こんどはまたたくネオンがまた美しい。

湯槽たねより見上ぐるさきに銀河澄む

湯につかりながら夜空を眺めるのは、まさに極楽、極楽。

夜風ふと匂ふ潮しほの香星月夜

夜の横浜を散策して。

潮の香もありサルビアも咲き満ちて

山下公園にて。

天守閣 往事 茫々 秋時 雨

九月十八日、小田原城に登る。いろいろな記述を読み、往事を偲ぶ。城外は急にしぐれる。

夕映えの伊豆の山並み雁渡る

九月十八日、小田原から湯河原へ長男の車移動。

かりがねや北に丹沢西に富士

「もう秋だなあ」としみじみ……。

伊豆山の 大景 据えし 秋座 敷

九月十八日、湯河原の敷島館に一泊。伊豆の山並みがすぐ前にあつて、眺めはなかなかのもの。

一日を湯宿に遊び秋料理

久しぶりに日本料理を賞味する。

湯河原にゐて吾子<sup>あ</sup>のこと秋深し

「亡くなったためぐみも連れてきてやりたかったなあ！」と、ふと……。

ひさびさの晩酌効きぬ萩の宿

久しぶりに飲んで、すっかりほろ酔い気分。

せせらぎを子守唄とし露の夜

前を流れる谷川のせせらぎが子守唄のよう……。

前山の墨絵のごとく烟る秋

翌朝、前山に霧がかかり、さながら一幅の絵を見ているような美しさ。

露の世のひと日の旅を愉しめり

一日一日を悔いなく過ごした  
いもの、と……。

長鳴も王も老いたり露の玉

テレビで見る二人。「盛者必衰はことわり」とは言うけれど、年老いた姿を見るのは寂しい限り……。

大阪に台風迎へに来たやうな

大介、九月二十一、二、三日、大阪へ旅行すれど、連日台風七号、八号に見舞われた由。

文ふ机づくえに芭蕉の句集秋深し

いつも机上にある「芭蕉文集」「芭蕉句集」に怠け心を叱責されている感じ。

吾子逝きて身に沁む風となりけり

めぐみが逝って、はや七年。老いの身に秋風がしみる。

蝸ひぐらしや泡末ほうまつ夢幻の世を生きて

はかない命をけんめいに生きている姿に一種の感動さえ覚える。

今日といふ日をけんめいに秋の蟬

蟬を見習わないと……。

空<sup>うら</sup>蟬<sup>せみ</sup>や生<sup>せい</sup>者<sup>じゃ</sup>必滅<sup>めつ</sup>とはいへど

「生ある者は必ず滅びる」とはわかつてはいるけれど……。

露<sup>つゆ</sup>の世<sup>よ</sup>や閑<sup>かん</sup>雲<sup>うん</sup>野<sup>や</sup>鶴<sup>かく</sup>を願<sup>ねが</sup>ひつつ

故郷に帰って悠々自適するのを夢みながら……。

老<sup>おい</sup>いの秋<sup>あき</sup>酔<sup>すい</sup>生<sup>せい</sup>夢<sup>む</sup>死<sup>し</sup>はするまいと

どんなに老いても空しく一生は終えたくなし、と……。

長<sup>なが</sup>き夜<sup>よ</sup>や百<sup>ひゃく</sup>薬<sup>やく</sup>の長<sup>なが</sup>たしなみぬ

たまにはゆっくり酒をたしなむのもまたよし、か……。

かなかなやここをせんどと競ふかに

鳴き競っているかのような蟬しぐれ。

生くるとは難<sup>かた</sup>しきことよ露しぐれ

あまり考えすぎないようにしているが……。

さまざまな声の混りて虫の秋

虫しぐれに、しばし疲れた心身が癒されることあり。  
NHKの「俳句王国」で、宇多喜代子の十選に入選。

甲州にけふは旅人葡萄<sup>ぶどう</sup>狩

秋の一日をゆつくりと……。

巨峰食む妻との刻をいとほしむ

元気になってきた範子と、ひ  
ととき秋の味覚を存分に。

俳句大会にて

はからずも入選したり仲の秋

九月二十七日、「俳句朝日」  
創立三周年記念東京俳句大会  
にて思いがけず入選。「丹沢  
の大景据えし秋の宿」が入選  
句。

入選の栄に浴せり秋の昼

秋の日も入選を祝福してくれ  
るかのようで……。

遠くなる吾子の勤務や雁渡る

長男大介、十月一日より、ホ  
リデイ・イン東武成田に向向。  
社員寮暮らしとなる。



秋の夜やひと言のみの子の電話

要件のみでも、元気な声に安心。

今年また夢の潰えて紅葉散る

十月三日、今シーズンの最終戦で、広島を六対四で破るも、巨人、優勝はかなわず。

林檎剥く旅の長子を想ひつつ

初めて家をはなれて一人暮らしをする長男を思つて……。

富士霊園にて七句

富士見ゆる吾子の墓訪ふ秋日和

十月四日、長女めぐみの七回忌の法要を、静岡県の富士霊園にて。

花あまた供へてありし草紅葉

花もたくさんあって、めぐみも喜んでいるかな、と……。

吾子の墓ひっそりと咲く野菊かな

近くには好きだった野菊も咲いていて……。

吾子眠る霊園わびし吾亦紅

広々とした霊園の一角に眠るめぐみ。一人では寂しいだろうなあと思うと……。

吾子ありし日々の遠くに葛の花

めぐみが逝ってはや七年。十萬億土のかなたへ旅立ってしまったのは、ついこの前のような気がするが……。

改めて吾子の亡きこと秋惜しむ

めぐみのいない秋は一段と寂しさが身に沁みる。

霊園に冷酒を酌みて忌を修す

読経のあと、霊園の座敷で、田口家の人たちと。

七十に三年とせまり温め酒

十月八日、哲三、六十七歳の誕生日を迎える。酒を温めて飲むと病気にかかることがないとの言い伝えがあるとか……。

満天の星きらめきて秋涼し

十月八日、横浜ベイスターズ、対阪神戦に四対三で逆転勝利し、ついに優勝。三十八年ぶりの夢の実現。おめでとう、ベイスターズ！

生涯のいまが倅せ紅葉狩

肺癌手術後一年。元氣になった範子と遠出。今が一番いいときかも……。

妻と子のあるは倅せ菊なます脛

家族三人が健康であることを神に感謝。これでめぐみが生きていたら言うことなし、なのだが……。

四番打者眉一文字星月夜

十月十七日、横浜と西武の間で、日本シリーズ始まる。

老いてなほ野球に夢中天高し

我ながら、あきれるほどの野球好き。巨人の出ない日本シリーズはあまり関心がないはずなのに……。

身に沁むや競ひし友はいま病みて

小学校からの親友F君、いま病床にあり。

眠りより醒めて驚く秋の闇

夜中にめざめると、奈落の底にいるかのように……。

逝きし子の愛読書あり秋灯下

ふとめぐみの愛読書に眼をとめ、感慨にひたる。

職を辞す意志を固めし十三夜

もうホツホツ引退の潮どきかと、来年三月で退職する意志を固める。

辞表出し悔いは微塵も暮の秋

四十三年間も全力投球してきたのだからと……。

長き夜や亡き子の部屋に灯ともして

ある秋の夜長に……。これも「俳句朝日」東京俳句大会での入選句。

丹沢や茜あかねに昏くれて芒すすき原

一日を丹沢に遊ぶ。茜色に染まる丹沢の美しさは筆舌に尽くしがたいほど……。

芒原丹沢の嶺ねの大入日

荘厳な入日にただうつとりと……。

昏れなづむ丹沢の嶺や秋深し

いよいよ秋も深まったかと、  
ちよつと感傷的に……。

丹沢の嶺やはらはらと秋しぐれ

あいにく時雨にあつて……。

妻と来し径みちは花野に続きけり

自然の真つただ中にあつて、  
気分爽快。

栗飯や吾子との刻ときのかへらざる

出来ることなら、好きだった  
栗ご飯を食べさせてやりたい  
ものと……。

吾子の声聞きしとおもふ秋の風

秋にはこのようなことがしばしば。

菊の香や遺影の吾子は笑むごとく

遺影を見るたびに、微笑み返してくれるような気がする。

一枝づつ供へて菊の香の高し

めぐみの墓前で。

秋晴れや特選の栄賜はりて

十月二十五日、第九回黒羽芭蕉の里全国俳句大会にて、森澄雄先生の特選を得る。「逝きし子と花野にてまた遊びたや」が特選句。



特選を得たる句会や菊薫る

自分でも信じられない栄誉。  
特選の表彰を受ける哲三の晴  
れ姿に、範子、感激す。

逝きし子に告ぐることあり暮の秋

めぐみに「お前のことを詠ん  
だ句が特選になったよ」と報  
告したい気分なり。

黒羽に芭蕉をしのぶ里の秋

黒羽町の芭蕉の里で、しばし  
俳聖芭蕉に思いを馳せる。

寂々と芭蕉の里や秋しぐれ

「わび」「さび」の境地を少し  
ばかり。

露天湯に歪みてあるや後の月

その夜塩原温泉に一泊。一人で露天風呂に入って……。

妻と来し山湯の里の紅葉かな

翌日、塩原温泉郷のみことな紅葉を心ゆくまで堪能。

長年の夢をかなへて秋の星

十月二十六日、日本シリーズ第六戦、二対一で西武を破り、四勝二敗の成績で、ベイズターズ、三十八年ぶりに日本一となる。

縁側の焼けんばかりの秋日和

なんとも爽やかで、快晴の一日。日向にいと暑いほど。

菊匂ふ部屋吾子在りし日のままに

部屋はまだ生前のままに……。

菊の香や遺影は若きままなれど

遺影のめぐみは相変わらず若い日の微笑を浮かべているが、もう亡くなってから七年になるとは……。

赤とんぼ露風も愛<sup>め</sup>でし茜<sup>あかね</sup>かな

三木露風の詞になる歌曲、「赤とんぼ」を彷彿させるとは、ような美しい茜空。

改札は省略の駅赤とんぼ

栃木県の両毛線のある駅の景。

秋思かなこれからのこと過ぎしこと

秋はものを思わせるか……。

骨折で安楽死とは秋あはれ

十一月一日、秋の天皇賞レースで、サイレンススズカ、断トツのトップで疾走するも、ゴール直前で脚を骨折。

吾子逝きてより身近なる銀河かな

これは実感。

吾子在らむ夜々濃き銀河かかる辺<sup>へ</sup>に

めぐみのいる天国はあのあたりかと……。 「俳句朝日」埼玉俳句大会にて、小澤克己先生の特選句となる。

あらば欲し吾子在る銀河への切符

「天の川」行き切符があれば、めぐみに逢いに行けるのになあ」と……。

菊咲きて吾子の忌日の近づけり

毎年菊が咲く時期になると、「あつ、また一年立ったか」と……。

## 冬の章

冬立つやふと目にとまる訃報欄

ひとしお、寒さが身に沁みる。

根深汁嗜好異なる夫婦かな

範子はネギの味噌汁大好き人間。哲三は大のネギ嫌い。

小春日や亡き吾子のこと妻のこと

ふと、今は亡き長女めぐみのことや、術後の範子のことなどに思いをいたして……。

陽<sup>ひ</sup>を溜めて幽<sup>かす</sup>かに揺るる柿すだれ

十一月十二日、葉山への旅の途中で。農家の庭先いっぱいに吊るされた干し柿の列に目を奪われる。

葉山にて八句

潮の香のありて小春の海の宿

十一月十二日、葉山海岸の相模湾に範子と宿泊。

湾臨む湯宿に冬の陽の満ちて

相模湾べりの宿の部屋に小春日がさし込んで……。

小春日や釣り人あまた風なぎの海

突堤や小舟にて釣りを愉しむ人々多し。

雲間より日差しの洩れて冬の海

おだやかな風ぎの海に冬の日がいく筋も洩れてきて、それはそれは形容しがたい美しさ。

もてなしは一夜干しなる寒かれい鮓

夕食にでた鮓の一夜干しのうまかったこと！お土産にたくさん買ってきたほど……。

小春日や鏡のごとく風ぎし海

海面が鏡と見まがうほど。



風ぎの海冬の日輪沈みゆく

すばらしい日没を目の当たりにして。思わず嘆声を漏らすほど……。

風ぎの海夕日大きな小春かな

真っ赤な、大きな、大きな夕日。まさに絵のような美しさ。

吾子の忌を迎ふ障子を貼り替へる

命日にそなえて……。

吾子逝きてはや七回忌菊薫る

つい、この前のような気がするが……。

葛餅を供へて吾子の忌日かな

好物を供えて故人を偲ぶ。

露の世を生きて吾子の忌修しけり

十一月二十九日は長女めぐみの命日。

愛でし子は極楽浄土冬の雲

いま、かの地でどうしていることやらと、つい……。

逝きし子よかの世に菊の園ありや

さまざまな菊の咲き乱れている中で遊んでいるのかしらと……。

面影のなほあざやかに菊薫る

七年たっても、めぐみの面影  
はいまも脳裡にはつきりと  
……。

ひさびさに友と熱爛なが話

十二月七日、久しぶりに昔の  
同僚のU先生達と新宿で。

また咲けり吾子の遺せしシクラメン

めぐみが遺していったシクラ  
メンが今年も花をつけた。  
生まれ変わりのような気がす  
ることも……。

吾子亡きは夢まぼろしか冬の虹

いまだに「ただ今」と言っ  
て帰ってくるような気がしてな  
らないことがある。これが未  
練というものなのだろうか。

吾子の忌につづき母の忌紅葉散る

十二月十一日は母の命日。もう五十年もたったとは……。

書架にまで日差しとどける冬至かな

太陽の高度が低くなって……。

古稀近き身を沈めけり柚子ゆずの湯に

無病息災を願って……。

癒えし妻今年は柚子湯あふ溢れしむ

手術後一年三ヶ月。元気で柚子湯に入れるとは、まことに僥倖。

一年はかくも迅はやきや年の暮

「光陰矢のごとし」とはよく言ったもの。

癒えし妻てきばき仕事納めして

肺癌を克服した範子。その働きぶりに感心。

巨匠逝きひときは昏くらき年の暮

十二月三十日、木下恵介監督逝去。

二十四の瞳も濡れて年惜しむ

名作「二十四の瞳」を思い出して。

紅白や馴染めなき唄多くして

若い歌手のうたにはどうしても馴染めないのは年のせい？

紅白や衣装を競ひ唄きそふ

小林幸子と美川憲一は相変わらずキンキラキン……。

ことごとく野暮用済ませ除夜の湯に

なんとも言えないいい気分。

湯に沈み妻と子と聞く除夜の鐘

家族全員が健康で越年できる  
悴せを実感しながら……。

吾子亡きを託<sup>かた</sup>ちかこちて年送る

これで長女めぐみさえいれ  
ばと、範子はぐちをこぼすこ  
と、しきり。

元旦や遺影の吾子に「おめでたう」

めぐみにも新年の挨拶。

初空や王者のごとく富士ありて

堂々たる富士の英姿に感動。  
まさに、「初空に君臨したり  
富士の山」という感じ。

初春や元氣になりし妻のゐて

病いの癒えた妻がかたわらに  
いることに、ただただ神仏に  
感謝あるのみ。

願ひごと初湯につかりつぶやけり

今年一年、家族全員が元気で  
ありますように、と……。

遠き過去ほど鮮明に去年今年

最近のことは忘れがちだが、  
不思議と昔のことは……。

茜あかね空ふるさとの雪いかばかり

天気予報では越後は雪とか。

眼まな裏うらに雪の降りしく幼き日

ふと豪雪だった子供時代が思  
い出されて……。



ふるさとの越後は遠し初電話

故郷、柏崎の兄から電話をもらう。「ふるさとは遠くにありて思うもの」というが、なつかしきはひとしおなり。

ふるさとは吹雪とて佳<sup>よ</sup>しうからるて

兄弟・親戚のいるふるさとは、たとえ吹雪であっても。

新年のくるたび吾も老いゆくか

新しい年を迎えるたびに体力の衰えを痛感。

駅伝のスタート前の淑<sup>しゆ</sup>気<sup>き</sup>かな

一月二日、今年も好きな箱根駅伝を……。

正月といふに寝込みて老いを知る

あれほど気をつけていたのに  
四日、五日と二日間も風邪で  
寝込むとは……。

老いしこと痛感したり寝正月

なかなかよくなならない風邪に  
老いを実感。

襟巻も老いは隠せぬ渋谷かな

若者で賑わう渋谷の街中では  
若造りしたつもりでも……。

日当りのよき座を妻に日向ぼこ

たまには範子と二人で、のん  
びりと……。

初場所や賜杯は猛なげき若武者に

一月二十四日、千代大海、十  
三勝二敗で優勝、大関となる。

流感や二十日も臥床果つるか

とひどい流感にかかって……。

流感に六腑の痛み果てもなく

つぎつぎ身体のあちこちが痛  
んで……。

流感や遺書をしたたむほどにして

こんなひどい風邪ははじめて  
なり。体重が四キロ減。

なにもかも流感癒えてからのこと

すべては流感が直ってからと  
ひたすら療養に専念する。

ともかくも病臥にたへて春隣

やっとなんとか床上げする。

熱爛や順位予想のよりあつく

友人達との今年のセ・リーグ  
の優勝予想に熱く燃える。  
「巨人はわが命」の身なれば  
……。

熱爛にちらちら見える人の性さが

酒が入るとその人の本性が  
出てくるもの。

老いたるか危うく喉のどに鱗たらの骨

年はとりたくなし。

いつの世もはかなきものか冬の虹

一月三十一日、ジャイアント馬場、他界。プロレスの王者も癌には勝てずか、と……。

## 春の章

生き死には神に任せて春を祝ほぐ

二月三日、立春。

心憂し名優逝きて梅二月

芦田伸介、三木のり平、山岡  
久乃と、つぎつぎ他界。

喧騒の街中にふと沈じん丁ちよう花げ

その芳香に春の訪れを感じず。

吾子在らば不惑ふわくとならむ鳴雪忌

二月二十日、生きていたら、  
今日は四十歳になるのに、と  
……。

途中下車したき梅見の東上線

越生梅林だけでなく……。

吾子に似しをみなに逢ひぬ四温径

散歩の途中で。

南縁に癒えたる妻とみてぬくし

暖かい春のひとつとき。  
NHK教育テレビ四十周年記  
念NHK全国俳句大会にて入  
選。

眼裏に亡き吾子のゐて雛ひなの宴

三月三日雛祭。

また吾子の話題にのぼるひな祭

つつい昔話となる。

どこからか梅の香ありて旅の宿

三月四日、勤務先の歓送会で、  
軽井沢の万平ホテルへ。



啓けい蟄ぢちや山やまののかなたは越この国くに

ふと、故郷を思い出して……。

遠山とんざんの果はてはふるさと寒かむ椿つばき

ふるさとの春に思いを馳せて……。

啓けい蟄ぢちや蕾つぼみの日ひ々々にほころびて

もう春だなあ！

在天てんの吾われ子の遊あそぶか春はるの虹にじ

ああ、あの空のどこかにめぐみがあるのではないかと……。

春の虹消えずあれかし天に吾子

めぐみが遊んでいるかも、と  
……。

列なして付かず離れず鳥帰る

鳥は北に帰ってゆくのに、めぐみは、と……。

丹沢の山並み美<sup>は</sup>しく霞けり

ある春の一日。

丹沢や春夕焼けの極まれり

夕焼けに染まる丹沢のなんと  
美しいこと！

教師とし老いて悔なし 朧<sup>おぼろ</sup>月

わが教師生活に悔いなし！

鯛飯やわが退職の祝ひとて

無事勤め終えたことを祝って。

晩節を汚さず退きてうららなる

三月三十一日、四十三年にわたる教師生活を終える。よくやったなあ！と自分をほめてやりたい気持。

肩の荷をおろして憩ふ遅日かな

なんとも言えないいい気分。

肩書きのとれて妻との春の昼

のんびりと、うららかな春の  
昼を範子と……。

妻癒えて寧<sup>やす</sup>けき日々や春炬燵

手術後一年半経過。

春炬燵癒えし妻との昼餉かな

こんな日が来ることを心待ち  
していたが、現実となって、  
本当に「ほくは幸せだな  
あ！」と……。

書に倦<sup>う</sup>めば眼を遊ばする花ありて

読書に疲れると、近くの桜並  
木に。

談笑の輪の散りぢりに花の闇

花見の宴も終わって……。

花吹雪浴びて生涯一俳徒

生涯、俳句を友としての決意をかためて……。NHK「俳句王国」中原道夫の十選で特選句となる。

春昼や亡き吾子憶ふことしきり

しばしばめぐみを思い出して。

まどろめば逝きし子のをり春の宵

うとうとすると、つい……。

花仰ぐ亡き子の齡とじの倍生きて

三十三で逝ったためぐみの倍も  
生きたなあ！と……。

酔へば増す悲しみもあり花吹雪

酒でも癒せぬ悲しみがあるも  
の。

わが思ひいかに伝へむ春疾はやて風

子供に先立たれた親の無念さ  
をどのようにして、と……。

来し方をふりかへりをる日永かな

六十七年間のことをいろいろ  
思い出しながら……。

湘南の湯は熱くして花ぐもり

四月五日、鎌倉の「あじさい荘」に一泊。目の前に相模湾あり。

春光の溢あふれて碧き相模灘

いかにも春らしい海のさま。蕪村の句を思い出す。

春潮や子らちらほらと由比ヶ浜

のんびりと海辺で遊ぶ子供たち。

吾子在らば愉しきものを春の海

めぐみを故郷、柏崎の海に遊ばせたことを思い出して。

のんびりと古刹こきやうめぐりや古都の春

一日を鎌倉で……。

鎌倉や癒えたる妻と花行あんぎやう脚あし

桜が満開。まさに花遍路とい  
ったところ。

花遍路妻の歩幅に合わせつつ

ゆっくりとゆっくりと……。

鎌倉を歩き五山の花に逢あふ

建長寺、円覚寺、寿福寺、浄  
智寺、浄妙寺と、それぞれ違  
った風情あり。



鎌倉のこの径が好き紅椿

源氏山公園付近の散歩道はとくに……。

山門を入れば花あり円覚寺

総門をくぐると正面にそびえる大きな威厳のある門構えに圧倒される。

托鉢の僧も憩へり花の寺

珍しい光景に出会えて僥倖。

土牢や鎌倉宮の春寒く

護良親王をしばし悼む。

花冷えの土牢昏くひっそりと

こんな土牢に幽閉されていたとは……。

御首塚見おろす木々や芽吹きたる

昔の悲劇を目の当りにしたであらう亭々と聳える木々。何事もなかったように芽吹いて。

熱投で国中沸かし春闌くる

四月七日、対日本ハム戦で、ルーキーの松坂大輔投手は一五五キロの速球を投げ、見事、勝利投手となる。

病む友を故郷に訪ふ花日和

小学校の頃からの親友を見舞う。

吾子 在りしやうに過せし花祭

四月八日、花祭で。長男大介の二十五歳の誕生日でもある。

春昼や健やかなるは倅せと

何があなくても、健康第一と……。

身の丈の寧<sup>やす</sup>けき余生花月夜

身分相応の日々を心がけて。

年金といふ禄<sup>ろく</sup>を食<sup>は</sup>み花遍路

年金生活を精一杯たのしんで……。

肩書きのとれて千金無為の春

「春宵一刻值千金」を実感しながら……。

職退きてより好日のつづく春

まさに、日々好日の毎日。

春<sup>しゅん</sup>宵<sup>しやう</sup>やひと待つ渋谷駅の前

ある春の宵のハチ公前。

春宵や何かいいことありさうな

なんとなく心が浮き浮きして……。

春の夜や余生可もなく不可もなし  
毎日が淡々と……。

床とこに臥すほどにはあらず春の風邪  
少々風邪気味。

寝そびれし夜やバサツと落椿  
夜の闇に落ちる椿はなんとも  
不気味。

春の塵ちり吾子の遺せし文ふ机づくえに  
ふと気がつく……。

新学期出逢ひ別れのロマン秘め

四月より、非常勤講師として、引きつづき、白鷗大学女子短期大学部へ出講。

学生の私語に半兵衛きめて春

学生の私語には、「知らぬ顔の半兵衛」をきめこんで……。

春雷に私語の少なくなりけり

ある春の日の教室で。

敗けのこむ巨人に春の日も昏く

四月十四日、対広島戦に破れ、巨人遂に最下位となる。

太陽の季節となりて風光る

四月二十三日、石原慎太郎氏、  
東京都知事として初登庁。

父母は十萬億土春の虹

四月二十九日、父の二十三回  
忌。

## 夏の章

父の忌を修しうからと夏座敷

久しぶりに兄弟姉妹が新宿の  
ホテルに集って……。

新緑や癌に克ちたる顔の艶

顔色のよい範子に安堵する。



何ひとつ片づかぬまま麦は穂に

家の片づけは遅々として進まず。

菖蒲湯に沈み来し方ふりかへる

たまにはゆっくりと……。

逝きし子にまた買ひにけり柏餅

遺影に供えて、お相伴。

五月憂しコソボの戦火おさまらず

五月八日、ユーゴの中国大使館誤爆さる。

眼の手術決めかねてをり柿若葉

涙道のつまりを、どうしたも  
のかと、いまだに迷う。

綱を張る偉丈夫に風薫りたり

五月二十六日、大関の武蔵丸、  
第六十七代横綱となる。

こまごまと言ひ置きて妻夏の旅

出不精な哲三を残して……。

母偲ぶ越後の里の祭かな

故郷、柏崎の「エンマ市」に  
思いを馳せて……。

鎌倉のなにかも好き青嵐

すっかり鎌倉に魅せられて  
……。

鎌倉のどの寺社も佳し七変化

七変化とは「あじさい」のこと。

鎌倉に探る名刹若葉風

自分でもあきれほど鎌倉に  
いれあげて……。

職退きて若葉の風をほしいまま

ストレスのない、自由の身の  
日々がこんなにすばらしいも  
のとは……。

寧<sup>やす</sup>けさは晩年にあり花菖蒲

心安らかな余生の日々。

坪庭の緑蔭とてもわが浄土

狭いながらも楽しいわが庭。  
「柿若葉狭庭といへどわが浄  
土」でもある。

一病と共生せるも衣更<sup>か</sup>ふ

病<sup>新</sup>気持ちの老いの身も気分一

老<sup>ろう</sup>鶯<sup>おう</sup>を天なる吾子の声と聴く

「夏のうぐいす」にふと……。

老鶯や天なる吾子の訪ふかとも

これは悲しい錯覚。

老鶯となりて亡き吾子訪ふてこよ

これはかなわぬ悲願。

夢に逢ふ若き日の吾子白日傘

夢の中では若い日のままで  
……。

短夜や老いの眠りの浅きまま

歳はとりたくないもの。

短夜や逝きたる吾子のことをふと

眠れぬ夜はつい……。

丹沢は西のまほろば大螢

「まほろば」とは、すぐれた  
よい所・国の意。

汗しつっつ妻に煎じる薬かな

癌予防に「アガリクス」を煎  
じる毎日。

緑蔭に憩ふ野球の敵味方

近くの駒沢公園にて。

緑蔭の若きら愛を憚はばからず  
今の若者達の一生態。

羅うすものを着て妻若くなり  
にけり  
新しい範子を発見？

深酔を妻たしなめて麦茶つぐ  
たまにはこんなことも。

師を逝かすこの六月をうらみけり

六月五日、柏新俳壇選者村山  
春灯先生ご逝去。

梅雨寒や妻は転移を告知さる

七月十三日、この日の検診で、肺癌の転移を宣告され、大きなショックを受ける。これまでに元気にしていたので、全く信じられない思い。

再手術妻告げられて梅雨寒し

範子にかける言葉が見つからず、哲三、うろたえる。

梅雨冷えや肺の写真の断面図

CTスキャンにゾツとする。

梅雨寒や妻癌の相しかと見て

気丈な範子に、ホトホト感心する。哲三はからつきし意気地がない。



竹皮を脱ぎ妻はまた癩を病む

範子の不運にただただひそかに涙するのみ。

さっぱりと髪を洗ひて旅支度

一家三人で、旅行にでかけることにする。

梅雨明けや熱海の海のより碧あをく

七月二十日、熱海の「ホテルニューアカオ」に泊る。海に面した部屋からは美しい熱海の海が眼前に。梅雨明けで、ひとときわ美しい。

夏海や初島著しるく指呼の間

初島が目と鼻の先に、絵のよ  
うに浮かんで……。

ふるさとの見せたきものに夏の海

哲三の一番のふるさと自慢である柏崎の夏の海に思いを馳せて……。

雲の峰越後は海の美しき国

子供の頃の柏崎の海はとくに……。  
第七回読売全国俳句大会にて入選。

逝きし子とまた食したき西瓜かな

生きていたら食べさせてやれるのに、と……。

大花火終りて闇のさらに濃く

多摩川の花火大会。

越後路の夏や六十路の同期会

紅顔の美少年達も今では……。

遠花火竹馬の友はニトロ口抱き

一病息災の者多し。

日盛りや妻の入院あわただし

七月三十日、慶応病院へ緊急入院となる。

炎昼や手術の不安増すばかり

うまく癌が摘出できるかと不安がつゆる。

もう少し生きてたしと妻晩夏光

息子の大介が家庭をもつまで  
は生きたいと……。

夏の夜や手術は遅々と十時間

八月九日、午後より手術が始  
まり、終了したのが午後十一  
時。

右肺の半分切除夏の闇

切除された大きな肉の塊に思  
わず眼をそむける。

大手術妻凌ぎけり夏ともし

無事手術に耐えて、集中治療  
室へ。

生と死の狭間に妻や汗ばみて

点滴・吸入・ドレインの痛々しい姿に思わず涙ぐむ。

夏の夜や術後の妻の汗ぬぐふ

そつと汗を拭いてやる位しかできない自分がくやしい。

夜の秋術後の妻の手をひしと

必死の思いで力づける。

夏の夜や手術終へたる妻眠る

一応落ちついた様子にひと安心する。

もの言はぬ妻を看取りて夜の秋

心細いことといったら……。

夏の夜の外科病棟のしじまかな

真夜中の胸部外科病棟は奈落の底のような感あり。

涼しさや言葉少なき妻とゐて

冷房のきいた癌病棟だが……。

大花火妻を死なせてなるものか

近くの神宮球場では派手に花火があがっているが、これを心に固く誓う。

消 灯 の 妻 の 病 室 螢 籠

闘病生活のつれづれを慰める。

見 舞 品 分 け て 盛 夏 の 四 人 部 屋

お互いにお見舞いにいただいたものをおすそ分けして……。

格 子 め く 病 院 の 窓 夏 日 濃 し

範子曰く、「まるで籠の鳥ね」と。言いて妙。

日 々 暑 く 傷 は 痛 み て 息 苦 し

見ている方がつらくなるほど……。今年の夏はことのほか暑い。

炎 昼 や 欠<sup>あく</sup>伸<sup>び</sup>と て 胸 痛 ま し む

欠伸もうっかりできないとは……。

激 痛 と た た か ふ 妻 の 夏<sup>なつ</sup>安<sup>あん</sup>居<sup>ご</sup>

「ヴォルタレン」のお蔭で、少しはいいようだが……。

眠 剤 の お 世 話 に 妻 の 夜 の 秋

睡眠薬、様々であるが、それも効かないこと多し。

日 盛 り や 咳 こ む 妻 の 背 を な で て

ただ、おろおろするばかりだが……。



朝ぐもり妻身動きもままならず

寝返りもままならぬ様子に  
……。

清拭を終へたる妻や夏衣

看護婦さんに身体をさっぱり  
と拭いてもらって……。

髪洗ひ病衣の妻に笑みもどる

やっと念願の洗髪をしてもら  
って……。

点滴の針抜かれけり夏土用

やっと点滴が終わる。

朝涼や点滴の跡痛々し

どす黒く腫れ上がって……。

病床の妻に見せたき盆の月

病院からの帰り道、ふと空を見上げると……。

宮仕へしたるスーツを土用干し

いろんな思いが去来する。

老いたれど巨人に執し暑に耐ふる

年をとつても巨人に対する情熱だけは……。 「頑張れ、ジヤイアンツ！」

肩肘を張らず暮して生いき身み魂たま

淡々と年金生活を送って……。

執着のなき身なれども冷ひや奴やつこ

もうあまり欲はないが、冷奴だけは別……。

行く夏や休み休みの妻の試歩

恐る恐る病院内を……。

試歩の妻日々距離伸ばす晩夏かな

一日と元気になって……。

同病と挨拶かはす試歩の夏

同じようにリハビリ中の入院患者と……。

快方へ向へる妻や秋近し

驚異的な回復ぶりに、ただただ神仏に感謝。

病院へ日参の日々夏果てぬ

今年はずいに病院通いで夏が終わる。

秋立つや強気弱気の子後の妻

日によって気分の変動がはげしい。

退院の妻を迎へる布団干す

ほつほつ退院の準備にとりかかるが、嬉しい限り……。

退院の妻と眺むる今日の月

八月二十九日、無事退院。

臥す妻の眼を愉します  
酔<sup>すい</sup>芙蓉<sup>ふよう</sup>

家での静養の日々に……。

退院の手足遊ばす  
秋日和

お天気のよい日はサンルームで。  
「俳句朝日」創刊四周年記念  
東京俳句大会にて入選。

リハビリの妻にさしかく日傘かな

体調のいいときは、少しずつ柿の木坂を散歩。

退院の妻に届きし今年米

快気祝いに、故郷の次兄から新米を送っていただく。温かい心づかいにただ感謝。

## 終章

『雪椿』より再録

身に沁しみむやよもやの告知妻受けて

癌告知妻うけとめし子規忌かな

癌告知されたる妻や秋寒し

秋深し妻に肺癌ありといふ

老夫婦のみの年の瀬手を抜きて

妻は病み長女いま亡き年暮るる

再発におびえる日々の妻の春

涅槃ねはん西風にし病臥の妻に鶴折りて

病む妻のお供は久し花衣ころも

啓蟄けいちつや妻に弱氣の虫るでて

病わくら葉はや思ふはいつも妻のこと

癌いといふ忌いまはしき語や梅雨寒し

梅雨寒や妻に愉たのしみなど何も

転移てふことばは禁句妻の夏

入院となりたる朝の暑さかな



病院は「べからず」づくめ厄日かな

手術日の決まりし妻と月愛でて

凌げかし吸入つづく長き夜を

ベッドには寡黙なる妻秋の昼

恙身の妻に代りて菊供養

菊の香の包む術後の眠りかな

退院となりたる朝の涼しさよ

甦る命いとしや萩の花

退院の素足遊ばす良夜かな

旬の香の満ちたる厨初きのこ

秋の雷ききつつ妻にものを煮る

退院の妻涼やかに厨ごと

癒ゆること信じて妻と初詣

退院の妻の作りし雑煮かな

書初めや妻に閑しずかな刻ときありて

冬晴やCTスキャンは異状なく

妻病んで一人二役冬日向

団だん樂らくの術後の妻や着くぶくれて

春日傘術後の妻に傾けし

退院の妻とひと日を青き踏む

湯豆腐や嗜好しこうを異にして夫婦

うらら日ひや病臥の妻の布団干す

妻の治癒近き予感や五月光こう

これからもともに生きたし花いかだ筏

年金を受くる身となる秋思しゅうしかな

ひたすらにわが道生きて夜半よはの秋

夢はまだいろいろありて老いの秋

亡き吾子あなこの夢よりさめて冬ふゆ隣となり

菊供ふ遺影は若き日のままで

菊の香かや逝ゆきし子のまた眼裏まなうらに

いくたびも吾子と来し径石みちいし落おの花

まだ妻の帰らず雪の降りしきる

老いの身も倅こせ長子卒業す

巢立つ子や大いなる夢秘めしまま

春惜しみつつ学舎まなびやに歩をせかす

学生の待つ教室に春日満つ

いくたびも私語をやめよと春の昼

私語多き授業に春愁極まりぬ

春寒や遅刻者多き朝なりし

春雨に教職の憂さ忘れぬし

心ふと弛ゆるぶひと日や風薫る

草餅や母の味には遠けれど

秋彼岸吾子は遺影の中で笑えむ

お茶漬で済ます夕餉や秋土用

亡き吾子に好みし野菊手折たおりけり

ふるさとの家並いえなみをふと盆の月

秋冷や一炊すいの夢古稀近し

あるがまま生きゆくつもり秋闌たける

逝きし子と花野にてまた遊びたや

身の丈たけのつましき暮し牽けん牛ぎゆう花か

吾あに余白いくばくなりやちちろ鳴く

吾子あこの忌や晩秋にしてあたたかし

会者えしゃ定離じょうり眼裏まなうらに吾子菊薫る

菊日和遺影はいまだ生けるごと

吾子の忌や遺のこせし冬着手にとりて

秋風や逝きたる吾子の声をふと

朝寒や遺影の吾子に独り言

ふるさとは心のよすが雪椿

吾はなほ寄せ鍋好きの越えち後ご人びと

老いてなほ好き嫌いあり初はつ時しぐれ雨

妻子との湯治の旅や冬ぬくし

冬の温泉や子と来し方を語り合ふ

春浅き湯治の客の国訛り

春愁や幼馴染の逝きしより

教員の身なれど無為の春の日々

入学子細身で脚のながきかな

春愁やわが眼の老いは紛れなく

一病と共生の日々花は葉に

一病も生きてる証し花菖蒲

本職に倦むこともあり若葉風

わが道は一筋の道夏に入る

何事もほどほどがよし釣つり忍しのぶ

麥むぎの秋今はいずこに原節子

咲き誇る花にはげしき迎へ梅雨

眼鏡失うせ疎うとましき日や朝曇

短みじか夜よや悔いいてせんなきことを悔い

甚じん平べ着て旅のひと日を寛くわげり

学生の欠あく伸び大きな夏日かな

日盛りやときに我慢も限界に

夏風邪や気だけは若いつもりでも



学生のみぬキャンパスや蟬しぐれ

炎昼や故郷の海の遠きこと

病む妻に夜具かけなほす夜の秋

虫干や吾子の遺品の色褪あせて

わが老いをうべな諾ひをりし星月夜

### あとがき

思えば一九九八年九月から一九九九年八月までの一年間は、私の生涯にとって忘れがたい一年となった。

妻の範子は肺癌手術から一年経過していて元気になっていたが、私の方は去年の十月で六十七歳となった。勤務先の大学は七十歳が定年なので、それまであと三年あったが、心身とも元気なうちに、余力を残して身を引きたいという思いが強くなった。

四十三年にわたる教員生活を終え、今後は病身の妻とのんびり余生をたのしみながら、俳句を詠みつづけてゆこう、と決心したのである。

考えてみれば、郷里の柏崎で、大場遍路、山田良平両先生から俳句の手ほどきを受けてからかれこれ五十年。途中の長い中断のあとなんとか細々とつづけてきた俳句の勉強だったが、今年の六月、以前からご指導をいただいていた村山春灯先生が亡くなられてからは、

また、文字通り無所属の一匹狼となってしまったのである。

そうこうしているうちに、今年の七月、妻が肺癌の転移のため、再入院、再手術ということになった。前回の手術から二年近くたっていたし、元気になっていたので、大変なショックを受けたが、気をとりなおし、妻の闘病記録とともに、この区切りの一年を単純明快な俳句で日記がわりに記録しておこうと思ひ立ち、第二句集『夏海』として出版することにしたのである。

なお、第一句集の『雪椿』の中からご好評をいただいたものを終章として再録した。あわせてお読みいただければ幸甚である。

この句集もまた、『雪椿』同様、NHK文化センターの宮脇一雄氏にお願いし、お手をわずらわすことになった。ここで改めて宮脇氏に心からなる謝意を表する次第である。

一九九九年秋

石 黒 哲 三

第二句集 夏海

平成十一年十二月二十六日

著 者 石 黒 哲 三  
発行者

〒152-0022 日黒区柿ノ木坂一―三―二〇

☎〇三―三七二四―三九三四

委託製作 NHK文化センター

〒107-8601 東京都港区南青山一―一―一  
新青山ビル内

☎〇三―三四七九―二五一一

印刷・製本 藤原印刷株式会社